

琉球大学学術リポジトリ

方言系統地理学：歴史言語学から列島形成史へ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa / 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33730

【研究論文】

方言系統地理学—歴史言語学から列島形成史へ—

かりまた しげひさ*

**Dialectal Phylogenetic Geography: Clarifying the History of Ryukyu
Archipelago Formation through Historical Linguistic Research**

KARIMATA Shigehisa*

要旨

琉球列島全域の言語地理学的な調査の資料を使って、構造的比較言語地理学を基礎にしながら、音韻論、文法論、語彙論等の基礎研究と比較言語学、言語類型論、言語接触論等の応用研究を融合させて、言語系統樹の研究を行えば、琉球列島に人々が渡来、定着した過程を総合的に解明できる。言語史研究の方法として方言系統地理学を確立することを提案する。

Abstract

This paper advocates the establishment of a field of “dialectal phylogenetic geography” as a method of historical linguistics. Linguistic phylogenetic research of Ryukyuan languages and dialects will clarify the historical processes of people’s migration and settlement on the Ryukyu Islands more comprehensively. By fusing basic research such as phonology, grammar, and lexicology, with applied research, such as comparative linguistics, linguistic typology, and language contact, utilizing research materials from linguistic geography that is based on structural linguistic geography in the historical and comparative field, can we better understand these processes.

* 琉球大学法文学部国際言語文化学科教授。 Professor, Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus.

はじめに

1. 琉球方言の多様性

琉球列島で伝統的に話されてきた言語は、琉球方言と総称され、本土方言全体と対立する大方言である。900 キロメートルにもおよぼんとする広大な海域に点在する島々ではなされる琉球方言にはおおきくことなる複数の母音体系がみられ、その体系を形成する個々のフォネームのアロフォンのあられ方も多様である。子音体系も同様である。

琉球列島の面積は日本全体の1%弱にすぎないし、住人の数も約1%にすぎない。しかし、琉球列島を日本の本州にかさね、琉球列島の北端の喜界島を宮城県仙台市に位置させると、那覇が長野県の西部あたり、石垣島は淡路島の西側に、最西端の与那国島は広島県近くに位置する。琉球列島の島々が仙台から広島県までの距離と同じ900km弱の海域に広がることに起因して、相互の意思疎通が不可能なほどの言語差がある。琉球列島の生物多様性はよく知られるが、琉球列島の言語的多様性も、生物多様性に劣らず多様である。

与那国島方言では母音フォネームの長短の区別が明確ではなく /a、i、u/ の3個を基本とする。ただし、1音節語には長母音があられ、感動詞や借用語などに /e、o/ があられる。最北端の奄美大島笠利町佐仁集落の方言は、母音フォネームに長短の区別があり、7個のみじかい母音フォネーム /i、ī、e、ē、a、o、u/ と、音色をおなじくする7個のながい母音フォネーム /i:、ī:、e:、ē:、a:、o:、u: / があるが、そのほかに4個の鼻母音フォネーム /ī、ā、ō、ē / があって、合計18個の母音フォネームがある。

宮古諸島のなかの大神島の方言は、有声破裂音 /b、d、g/ がなく、破裂音に有声／無声の対立がない。また、この島の方言には原則として拗音節がなく、日本語諸方言のなかでもっとも子音フォネームの数がすくなく、/p、t、k、s、f、v、r、m、n、j/ の10個しかない。しかし、/s、f、v、m、n/ は、成節的な子音として単独で拍を形成し、/s、f/ は、音節主音として母音フォネームのような機能をになって音節形成に参加する。

それに対して、沖縄伊江島方言は、破裂音と破擦音において有声／無声の対立だけでなく、無声の破裂音と破裂音と破擦音に喉頭／非喉頭化の対立があり、さらに、鼻音、流音、半母音においても喉頭／非喉頭の対立がある。無声子音の喉頭化した系列には /ʔ、kʰ、tʰ、pʰ、tʃ/ の5個、無声子音の喉頭化しない系列には /kʰ、tʰ、pʰ、ts、s、h/ が6個ある。また、有声子音の喉頭化した系列には /ʔm、ʔn、ʔr、ʔj、ʔw/ が5個あり、喉頭化しない系列には /b、d、g、dʒ、m、n、r、j、w/ の9個、合計25個の子

音フォネームがある。また、この方言は直音節と拗音節が対立していて、子音フォネームの体系は複雑である。母音の数は6倍、子音の数は3倍強の差がある。母音の数の変異の大きさからみても、子音の数の変異の大きさからみても、日本語の枠を超えている。文法的な特徴でも同様の変異の大きさがある。

琉球方言の変異の幅はおおきく、琉球方言内の言語差は、青森方言と鹿児島方言の違いに匹敵する。あるいは、その違いよりも大きいかもしれない。

琉球方言の個々の下位方言は、固有の音韻体系、アクセント体系、文法体系、語彙体系を有する独立した言語として存在する。

笠利町佐仁集落の方言の鼻母音 \bar{a} 、 \bar{i} 、 \bar{o} 、 \bar{e} は、語中 m の接近音化によって両唇の閉鎖が開放されて m の鼻音性が後続の母音に移動して発生したものである。 $*pama > pa\bar{a}$ (浜)、 $*jome > ju\bar{w}\bar{i}$ (嫁)、 $*kimo > k'jo\bar{o}$ (肝)、 $*kumo > k'o\bar{o}$ (雲)、 $*\bar{c}ima > \bar{c}o\bar{o}$ (島)、 $*mimidzu > m\bar{e}\bar{e}dza$ (蚯蚓)。

久高島の方言は、沖縄南部に位置しながら古代ハ行子音の p を保持する一方で、一部の p が無声の両唇摩擦音 ϕ に変化し、無声の奥舌軟口蓋破裂音 k の一部が声門摩擦音 h に変化している。 a 、 e 、 o と結合した k が摩擦音化して h になっている。 $*kadze > hari$ (風)、 $*kome > humi$ (米)、 $*kuwa > kwe: > he:$ (鋤)など。

久高島方言では、 a 、 e 、 o と結合した t が無声の歯茎側面摩擦音 λ に変化している。 $t > \lambda$ は、語頭だけでなく語中でもおきている。 $\lambda a:$ (田)、 $\lambda a \lambda a\eta$ (畳)、 $\lambda ippu:$ (鉄砲)、 λui (鳥)、 $\lambda u:$ (十)、 $\lambda o:pu$ (豆腐)、久高島方言では a 、 e 、 o 、 u と結合した s も λ に変化している。この変化は、歯茎音から側面音への調音点の変更である。 $\lambda a \lambda a:$ (砂糖)、 $\lambda a:ju:$ (白湯)、 $\lambda i \lambda i$ (煤)、 $\lambda i\eta$ (千)、 $a \lambda i$ (汗)、 λuba (側)、 $ku \lambda u$ (糞)、 $\lambda o:$ (竿)など。

動詞、形容詞の形態論、名詞の格=とりたての体系、文法現象のどれをとっても多様な言語現象を観察できる。そして、それぞれに個性的な特徴をもつ下位方言がある。

琉球方言が多様な下位方言から成り立っているとすれば、琉球方言研究は、その多様性がどのようにして生じたかをも明らかにしなければならない。あるいは、琉球方言の多様性を構成する久高島方言、大神島方言、佐仁方言のような個性的な下位方言も歴史的な変化の結果として存在している。個性的な下位方言が生まれた原因と変化過程を明らかにすることは、個々の下位方言の姿をより深く理解することにつながる。そして、琉球列島の地域社会がどのように形成されてきたのかの解明につながる。

2. 歴史言語学

歴史言語学は、文献資料をもとに言語がどのように変化してきたかを通時的に分析しようとする分野で、古い段階から新しい段階へと変化の過程をみていくことで言語史を構築する。

歴史言語学的な研究方法とはことなり、現在の言語状態から以前の古い言語状態を解明していく研究分野は、比較言語学とよばれる。比較言語学は、系統を同じくする語族の諸言語を比較・研究する学問分野であり、その共通点、相違点を考察して祖語を再建し、その祖語から諸言語への歴史的な変遷をあきらかにする。比較言語学は、広義の歴史言語学にふくめることもできるが、上にあげた狭義の歴史言語学とくみあわせて、「歴史比較言語学」とよぶこともできる。

広義の歴史言語学のひとつの分野として言語地理学がある。言語地理学は、特定の単語あるいは単語の文法的な形の分布を地図にえがき、そこにみられる言語現象の地理的な分布とその形成の歴史的な変化過程を解明することをとおして言語の歴史を研究する。『言語学大辞典第6巻 術語編』と『現代言語学辞典』は、それぞれ「言語地理学」をつぎのように説明している。

言語地図 (linguistic atlas) または方言地図 (dialect atlas) を用いて言語特徴の地理的分布を明らかにし、そこからその特徴の歴史的変遷を読みとる研究分野。p.1100

ある言語の語彙・語法などにおける何らかの言語現象の地理的分布を調査して、言語地図を作成し、これを基にして自然・人文地理的、社会的要因を考慮しつつ、地図に現われている分布が生じるに至った原因を究明して、ある言語の歴史的変遷をあつづけることを目的とする。方言地理学ともいう。p.368

言語地理学が1枚1枚の言語地図に描かれるさまざまな語形の分布状況を明らかにするには、音声学、音韻論、文法論、語彙論を基礎にして、個々の地点の言語形式を比較することからはじまるのであるから、比較音韻論、比較文法論などの比較言語学の研究方法が適用される。比較言語学は、複数地点の言語を比較研究するが、地理的な分布、対象となる地域の歴史、自然・人文地理的、社会的要因などを考察の対象としない。言語地理学と比較言語学の研究方法はことなるが、言語現象の変化の要因や過程をあきらかにするという点では比較言語学と密接につながり、言語地理学は、比較言語学におおきな影響をうけている。

言語がすぐれて体系的な存在だということをみとめるならば、1枚1枚

の言語地図をただ重ねていくのではなく、言語地図が体系のどの部分の、どんな要素を描くのか、言語地理学も構造と体系を前提にしなければならない。言語の構造や体系を積極的に取り入れたのが構造言語地理学である。構造主義言語学の進展とともに構造や体系を意識した構造的言語地理学は一般的になった。

言語地図は、対象となる地域の範囲によって「広域言語地図」と「狭域言語地図」とにわけられる。グロータース（1970）は、限られた地域の「全集落の網羅的調査にもとづく言語地図」を「微細言語地図」とよび、地点がまばらな「狭域言語地図」から区別している。また、グロータース（1970）は、『日本言語地図』のように全国を対象とする言語地図を「鳥瞰的広域言語地図」とよんでいる。

言語地理学は、地理的な分布として地図上にあらわれた音声、文法、語彙などのさまざまな言語要素の変種を比較することで、語形の新古関係を明らかにし、変化の過程と変化の原因をさぐる。言語現象の変異の分布状況が当該地域の地理的な、あるいは、歴史的な、あるいは政治・社会的な条件に影響をうけているばあい、それを規定する地理的、政治・社会的な条件を考慮しなければならず、言語地理学は、言語学だけでなく、歴史学、考古学、民俗学、口承文学などの周辺諸科学の成果をまなぶひろい視野がなければならない。

3. 琉球方言研究における言語地理学的研究

琉球方言研究における言語地理学的研究の嚆矢は、仲宗根政善（1934）である。仲宗根（1934）は「総てを網羅」し、国頭全体を調査したうえで「音韻分布図」を作成して、時代をさかのぼって音韻の変遷過程の解明をめざした。仲宗根（1934）の言語地理学は、言語地理学に比較言語学の方法をとりいれて、山原方言の子音の歴史的な変化をさぐるうとした構造的比較言語地理学の研究であった。

仲宗根（1937）は、「国頭郡下約百三十余字の中百二個字（小字を含む部分的には殆ど全字）」の不規則動詞「来る」の活用形を調査してえられた結果をまとめたもので、1枚の言語地図が付されている。

仲宗根（1937）には北部104集落の10個の活用形があるが、地図は、各語形を記号化したものではなく、10個の活用形をもとにそれぞれの地点の動詞「来る」の活用型（タイプ）をわりだして、「加行変格的活用」「加行四段的活用の甲類」「加行四段的活用の乙類」「良行四段的活用」に分類して、地図化している。ひとつひとつの活用形ごとに地図化するのではなく、10個の活用形を総合した「来る」の活用型という部分体系あるいは活用の内部構造を地図化した「文法体系地図」である¹。仲宗根（1937）

は、比較言語学に言語地理学の方法をとりいれて、山原方言の動詞活用型の分布と歴史的な変化を言語地図にえがいている。沖縄本島国頭郡の全集落を対象にした構造的言語地理学の「狭域微細言語地図」であり、部分体系をえがいた文法形態分布図である。

方言研（1963）、同（1964）は、沖縄本島全域から152地点の形容詞の言い切りの形の活用語尾がどんな形であられるかを明らかにするために選定された18語を調査し、その地域的変異をみるために、その結果を記号化して3枚の言語地図に描いている。狭域的な文法形態分布図である。方言研（1969）、同（1967）、同（1960）には沖縄島全域の一音節名詞のアクセント調査の結果が言語地図に描かれている。南部地区218地点、中部地区71地点、北部地区81地点、合計370地点である。調査項目は、1音節名詞1類7語、2類4語、3類10語、合計21語と、それぞれの助詞付の語形である。1音節名詞のそれぞれの類ごとのアクセント型を分析・総合している。さらにそれぞれの下位の変種に分けて記号をあたえて作図した1音節名詞のアクセント分布図を作成している。3枚の分布図をつなぎあわせると、沖縄島全体のアクセント分布図になる。それは構造的言語地理学の狭域（準）微細地図といえよう。

中本正智（1981）は、自らが収集した128地点206語の言語地図が解説とともに掲載されている。琉球方言全体を地図化して解説した代表的な著作である。掲載された言語地図には各地の語形が分類されて、語形の分布を示した解釈図である。総ての解説に「分布と歴史」の項がある。「目、鼻、手、肝」などは、母音や子音の分布や変化について述べられている。各項目にそれぞれの語形の語構成と変化過程が述べられている。全体は、語彙分布図によって占められている。鳥瞰的な広域言語地図である。

沖縄言語研究センター（代表：上村幸雄）は、1981年から琉球列島全体の言語地理学的な調査研究を行ない、1994年に約800の全集落の臨地調査を終了させた。現在は、その言語地図を作成して成果を取りまとめる作業に入っている。琉球方言全体をえがいた言語地図は、調査地点の数と広さでは『日本方言地図』におとるが、「広域言語地図」あるいは「鳥瞰的広域言語地図」である。しかも、沖縄言語研究センターが意図した琉球列島の全集落の方言分布を作図した言語地図は、鳥瞰的広域微細地図である。

沖縄言語研究センターが1981年から開始した言語地理学的な研究のための調査票の項目からは体系的なアプローチを考慮して項目が選定されていて、比較言語学的な研究とのつながりを意図していたことがわかる²。琉球方言の言語地理学的研究は、仲宗根（1937）以来、比較言語学の方法を融合させた体系的な言語研究がなされてきた。琉球方言研究における言

語地理学は、言語地理学と比較言語学を有機的につなげた仲宗根（1937）の構造的比較言語地理学をひきついでいる。

琉球方言全体を明らかにするには、狭域言語地図のたんなる寄せ集めではなく、琉球列島全域を対象にした広域言語地図の作成を意図しなければならない。広大な地域に点在する諸方言の大量の方言資料をつかって、そこにあらわれる多様な言語現象を「鳥瞰的広域微細地図」にえがき、琉球方言の生成と変容を詳細かつ緻密に分析し、明らかにしていくことができる。

4. 琉球祖語と基層語

日本語諸方言は、琉球方言と本土方言に大きく区分される。琉球方言がいつごろから琉球列島でつかわれるようになったのか、その時期はまだ特定されていない。おおくの研究者は、琉球方言の祖語が九州から島伝いに南下し、分岐の時期がどんなにふるく見つっても古墳時代以前にはさかのぼらず、下限も平安時代以降にはくだらないとかがえている。本土方言と琉球方言の近似性を考慮して、縄文時代、弥生時代の言語が琉球列島に渡来・拡散したとは考えられない。それを承認するならば、港川人をふくむ琉球列島の旧石器人も新石器人も縄文文化を携えた人々も、あるいは、弥生系の文化を携えた人々も琉球祖語を話していなかったことになる。

日琉祖語から分岐して発展してきた琉球方言を話している琉球列島の人々は、いつ琉球列島に渡来してきたのか。その人々は港川人の子孫である先住民と完全に入れ替わったのか。先住民と渡来してきた人々はまじりあったのか。あるいは、少数の人々がやってきて、言語を含む文化だけを入れ替えたのか。琉球列島にすむ我々は、港川人の直接の子孫なのか。本土から南下してきた日本語を話す人々の子孫なのか。それとも、ふたつの血が混じっているのか。そうだとすると、その割合はどうか。九州から琉球列島への人の移動の規模や回数はどうだったのか。九州のどの地域の人々が渡来してきたのか。約1千キロメートルにおよぼんとする琉球列島の隅々、とりわけ宮古島以南の南琉球、そのなかでも最南端の波照間島や最西端の与那国島に到達するまでかなりの時間を要したとかがえられる。その渡来も一度きりだったのか、複数回あったのか。複数回あったとして、それぞれの時期がいつで規模がどれほどのものであったのか。大規模な人の移動を伴わない言語接触だったのか。それらのことが琉球方言の形成にどんな影響をあたえているのかなどなど、琉球方言内部の拡散や言語接触や発展の姿も解明しなければならない。

もし、琉球方言が古墳時代以降に日琉祖語から分岐し、琉球列島を南下してひろがったとするなら、そのはるか以前にいた港川人たちが話してい

たのは日本語系の言語ではありえず、先行言語を想定しなければならない。先行言語（基層語）はどんな言語で、それは現在の琉球方言にどのような形でのこっているのか、あるいはどんな影響を琉球方言にあたえたのか。東北地方にのこるアイヌ語起源の地名のように琉球に固有の地名に残ってはいないか。亜熱帯に固有の植物や小動物、貝類や魚の方言名にその痕跡を残していないか。あるいはそれらに関する民族誌的な情報のなかにその手がかりがないか。生活に深くかかわらない分野の、基礎的でない語彙の詳細な調査が必要である。そして、その調査は琉球列島全域で実施しなければならない。すなわち、列島全域の方言辞典の刊行が必要なのである。同様に、比較、対照する周辺諸言語の調査、研究もおこなう必要がある。

日本人、および日本文化の起源をめぐる、考古学、形質人類学、遺伝子工学、その他の分野における最近の研究にはめざましいものがある。ひるがえって、方言研究はどうだろう。これまでの琉球方言研究は、たとえば、基礎語彙を中心に収集し、そこから得られる音韻法則をみちびきだしたり、類聚名義抄に由来する語のアクセントを調査したりしてきた。その結果、きわめて多くの、日本語との規則的な対応関係が見いだされた。それは琉球列島のほとんどすべての島々の方言で確認されていて、これまでの琉球方言研究のおおきな成果である。しかし、これまでの研究では先行言語を特定することはできなかつたし、日本人起源論の議論にまったくついていけなかつた。残念ながら、現在の琉球方言研究は、その議論の入り口にすら到達していない。

いまのわれわれは、基層語を特定することができない。しかし、21世紀中には可能になるかもしれない。科学の発展は、他領域のおもいがけない発見に触発されて飛躍的におこなわれることがある。偉大な発見は地道な研究の上になされ、その発見がつぎのあたらしい方法論をうみ、不可能とおもわれていた仮説の検証を可能にすることがある。そのために大量で、詳細な資料をのこしておかなければならない。

その仕事は緊急を要する。性急な日本化と近代化によって、そういう語彙を記憶する人が加速度的に減少しているからである。そして、その仕事は、消滅の危機に瀕している琉球方言を記録保存し、つぎの世代へ継承することにもつながるものである。

5. 琉球方言の歴史言語学的研究から列島形成史研究へ

琉球方言が日琉祖語から分岐して以降、相互の交流＝言語接触がないまま隔絶していたわけではない。琉球方言と本土方言がながい交流の歴史をもち、交流の波が一回きりのものではなく、そして、その交流の歴史を反映しているとすれば、琉球方言と本土方言との間に深い断絶があるわけで

はない。琉球方言と本土方言のあいだにひかれる境界線は、太い1本の線ではなく、九州からトカラ列島を経て琉球列島のあいだにたくさんの線がひかれている。幾重にも重なりあった薄皮を一枚ずつめくって琉球方言の生成と発展の歴史を解明しなければならない。南下してきた人々が保持していた言語も奈良や京都などの中央語ではなく、九州、おそらくは南九州にあった言語であったはずである。九州方言の琉球方言への影響の強弱や多寡は、下位方言によってことなり、奄美方言でおおきく、与那国方言でちいさい。

平安時代初期の日本語にみられるイ音便、撥音便、平安時代中期のウ音便、促音便が宮古方言、八重山方言、与那国方言にはみられないが、16世紀の『おもろさうし』には現在の沖縄方言の音便と同じ形がみられる。南琉球には奈良時代以前の特徴を保持する言語が伝播し、北琉球には平安時代以降の言語が伝播したのだろうか。

宮古方言、八重山方言は、8世紀奈良時代の日本語で失われた古代ハ行子音のpをよく保存する。同じ南琉球方言に属しながら、与那国方言は、pをhに変化させている。この地域差は何故おきたのか。奄美德之島の諸方言は古代ハ行子音をhに変化させているが、奄美大島最北端の笠利町佐仁集落の方言は、pをよく保存する。沖縄中南部諸方言、沖縄南山原方言（金武町、宜野座村、恩納村の方言）は、pをhに変化させているが、沖縄山原中央方言（今帰仁村、本部町、旧名護町、旧羽地村の方言）がpを保存する。北琉球方言にもpをよく保存する方言が存在するとするなら、平安時代以降のpを失った本土方言が伝播したとは考えられない。北琉球方言では、音便という文法的特徴の新しさと、古代ハ行子音p音の保持という音韻的特徴の古さの齟齬はどこから来るのか。

奄美大島南部の瀬戸内町の諸方言は、k'up（首）、mit（水）、ʔok（扇）、ʔapra（油）のような子音で終わる閉音節構造の単語を多く有する方言として知られている。瀬戸内町の方言は、一つにまとまり奄美大島南部方言を形成し、瀬戸内町以外の笠利町、龍郷町、名瀬市、旧住用村、旧大和村の方言と大きく対立する。奄美大島北部方言は笠利方言、竜郷方言、名瀬方言、住用方言、大和村方言の下位方言にゆるやかに下位区分できる。いっぽう、瀬戸内町は、リアス式海岸の入り組んだ陸上交通の不便な地域であるにもかかわらず、しかも大島海峡をはさんだ大島側と加計呂麻島側に分かれているにもかかわらず、奄美大島南部方言は、全体として方言差の小さい方言である。奄美大島に似た山がちの地形の沖縄島北部国頭村、大宜味村には方言差の大きな下位方言が点在する。奄美大島南部の諸方言の方言差が小さいのはなぜなのだろう。沖縄北部の方言差の大きいのは何故だろう。奄美南部と沖縄北部のちがいはどこから来たのだろうか。

比較的なだらかな地形がひろがる沖縄島中南部地域には、ひろい範囲に方言差の小さい下位方言が分布している。沖縄島中南部地域では有力な少数の方言が短期間に分散した可能性を想定できるが、同じことが奄美大島南部にも想定できるのか。沖縄島中南部と奄美大島南部のふたつの地域は同じことがおきたのか。

沖縄島中南部方言と沖縄島北部方言の境界のすぐ北に位置する恩納村恩納集落の方言は、古代ハ行子音の p を保持する方言としてよく知られる。恩納集落の方言は、それ以北の瀬良垣、安富祖、名嘉真の集落と共通の特徴をもちつつ、金武町や宜野座村との共通性も有するが、名護市以北のどの下位方言と比較しても破裂音が摩擦音化しない最も古い子音体系を有する。恩納村恩納方言の個性の発生にはどのような社会的、歴史的な理由があるのか。

慶良間諸島の阿嘉島、慶留間島の方言は、ke: (木)、te: (手)、me: (目) などのように 1 音節語、あるいは長母音にかぎって e: が i: に変化せず、e: のまま保持されている。阿嘉島、慶留間島の方言は、susu (煤)、tsura (顔)、midzu (水) のように s、ts、dz と結合する u が保持されている。母音体系に関していえば、阿嘉島、慶留間島の方言は、北琉球諸語のなかでも保守的である。阿嘉島、慶留間島でこのような現象がみられるのは何故なのか、隣接する座間味島、渡嘉敷島とはどこがちがっていたのか。人の移動と交流に差があったのか。座間島、渡嘉敷島とは言語接触のありかたが違っていたのか。古形を保存する要因は何なのか。

奄美大島北端の佐仁方言は、古代ハ行子音 p をよく保存するいっぽうで、a、e、o に先行する k を摩擦音化させている。この特徴は、喜界島方言や沖縄島北部方言と共通する。遠く離れた喜界島方言や沖縄北部方言と共通の特徴を有するのは何故なのだろう。佐仁方言は奄美德之島方言と同じく中舌母音を有しながら、他の奄美德之島方言には見られない鼻母音を有する。佐仁方言が“言語の島”たる特徴を有するのは何故なのだろう。

佐仁方言、久高島方言、大神島方言、与那国島方言、阿嘉・慶留間方、恩納村恩納方言などの個性的な方言はどのように形成され維持されてきたのか、地域外の人々の言語接触はどのような影響をあたえたのか。

6. 方言系統地理学

音声学・音韻論、アクセント論、文法論、語彙・意味論などの基礎的な研究分野、比較言語学、言語類型論、言語接触論などの応用的な研究分野など、既存の言語学を基礎にして研究を進め、言語現象の地理的な分布から、言語の変化と発展を時間と空間の座標軸で総合的に研究するのが構造的比較言語地理学である。言語現象の分布を生じさせた原因を解明するた

めに、自然地理的な、あるいは人文地理的な、あるいは政治・社会的な要因を考慮する。構造的比較言語地理学は、歴史言語学である。

人々が琉球列島に渡来・拡散して定着していく一方で、九州と琉球列島のあいだで、あるいは、琉球列島の島々のあいだで人的、文化的交流が行なわれて現在の状況がうみだされている。構造的比較言語地理学の成果を土台にしながら、民俗学や民族音楽、口承文学、歴史学や考古学や形質人類学などの成果を援用することができれば、琉球列島の発展の歴史、すなわち、琉球列島の地域社会が形成されてきた歴史を解明することができるかもしれない。

生物学の新しい研究概念として、John C. Avise は、1987年に初めて Phylogeography という学術用語を使用した。これは John C. Avise が提唱した新しい学問分野の名称である。Phylogeography を提唱し先導した John C. Avise が 2000年に学部上級者、大学院生、現役の生態学者、遺伝学者らに書いた著書の訳書のタイトルが、『生物系統地理学』（西田睦・武藤文人監訳、2008年）である。

「単なる実用語として芽生えたこの言葉“Phylogeography”は、近年では生物学、古生物学、および歴史地理学と豊かな結び付きをもつ、活気に満ちた青春期の研究分野へと花開いたといえる。／系統地理学的なもの見方は、自然界の小進化過程についての実証的な理解を革新したばかりなく、概念上の理解をも革新した」とまえがきにのべるように、新しい用語や名称、研究領域が生まれると、それまで表現しにくかった概念や回りくどく表現せざるをえなかった現象に言及しやすくなったり新たな視点を導入したり、既存領域への貢献をはたしたりしてきた。生物多様性、遺伝子工学などの名称もそんな例の一つであろう。

“生物系統地理学”は、分類学、生態学、系統学、進化生物学、保全生物学、多様性生物学、遺伝学、分子生物学と関わっている。“生物系統地理学”は、既存の学問の方法論を援用しつつ研究を進め、生物の空間的な分布について、その歴史的、系統的な側面を扱う。すなわち、生物の進化を時間と空間の座標軸で総合的に研究する。

構造的比較言語地理学を基礎に既存の複数の学問の研究成果に学び、琉球列島に人々が渡来、定着して発展してきたさまを言語現象の分布状況と個々の方言の言語体系の変異のなかから歴史をよみとり、その系統関係の解明をめざす総合的な研究を、“生物系統地理学”に倣って、“方言系統地理学”（仮称）を設定することは可能だろう。“方言系統地理学”を設定することで新しい研究目標を明確にすることができる。その目標にむかって琉球方言研究のこれまでの成果を最大限に生かすことができれば、“方言系統地理学”は一定の成果をあげることができるだろう。幾世紀にも

わたる詳細で膨大な世界の生物学の研究蓄積が“生物系統地理学”を生み出し、大きな成果を可能にした。消滅の危機に瀕する方言の継承をはかりながら、音声、文法、語彙に関する基礎的な調査、研究を積み上げなければ、“方言系統地理学”の可能性は追求できないだろう。

7. 方言区分と他の文化現象をみる

安里進 1990『考古学からみた琉球史 上』によれば、グスク時代の土器胎土の地域色から沖縄島南部の島尻地域は、B類主体圏とA・C主体圏とD類主体圏に区分できるようだ。A・C主体圏とD類主体圏の境界、あるいは、分布域は、方言地理学的にみた島尻（沖縄南部）方言の区分に近似する。すなわち、沖縄南部方言は、喉頭音化した接近音を有しない沖縄南部西側（ほぼ現在の糸満市域に重なる）方言と、喉頭音化した接近音を有する沖縄南部東側方言（現在の八重瀬町、南城市）とに区分される。また、西側方言では「兄」をアイヤーといい、東側方言では「アッピー」「アフィー」「アヒー」といい、語彙の特徴によっても東西に区分される。沖縄南部東側方言と西側方言の区分の起源は、グスク時代まで遡るのだろうか。この区分は、『おもろさうし』の巻十八「しま中おもろ御さうし」、巻十九「ちゑねんさしきはなくすくおもろ御さうし」、巻二十「こめすおもろの御さうし」の巻十八・十九と巻二十の境界に引き継がれている。

仲宗根（1937）によると、現在の恩納村から北の地域の動詞連体形の語尾には nu があらわれるが、この北の地域には、「アシャギ」とよばれる集落の祭場に設置された建築物がある。連体形語尾という言語現象の分布とアシャギという民俗事象の分布の重なりは、何を意味しているのだろうか。何らかの文化圏、方言圏の存在を仮定できるかもしれない。

奄美・徳之島地域は、母音体系、子音体系の共通性を有する方言圏を形成し、奄美德之島諸方言として他の琉球諸方言から区分できるが、これらの地域には奄美大島で「八月踊り」とよばれる共通の祭祀、芸能があるし、民族音楽的に固有の音階がある。いっぽう、沖永良部島、与論島、沖縄島北部地域には、ウンジャミ・シヌグと呼ばれる祭祀がある。そして、沖永良部島、与論島、沖縄島北部地域は、言語的に共通の特徴を有する。

このように、言語地理学的にみた方言区分が他の文化現象と重なるばあいがある。それらの共通性は何に由来するのか。時代的にどれくらい遡れるのか。人の移動や文化接触、言語接触があったのか。

先に提唱した“方言系統地理学”は、あくまでも言語学を中心にしたアプローチである。人の移動、文化伝播をふくめた琉球列島の地域社会が形成されてきた歴史を解明するには、民俗学や民族音楽、口承文学、歴史学や考古学や形質人類学、言語学（構造的比較言語地理学を含む）などの学

際的な研究が必要なかもしれない。

【注記】

- 1) 言語地図は、対象となる言語の領域によって「音韻分布図」「文法図」（あるいは「文法形態図」「形態分布図）」「語彙分布図」などに分けられる。
- 2) 琉球方言研究における言語地理学的な研究についてはかりまた（2009）を参照。

【参考文献】

- W・A・グロータース（1970）『鳥瞰的広域言語地図と微細言語地図』『方言研究の問題点』
明治書院（W・A・グロータース（1976）『日本の方言地理学のために』平凡社に所収）
- 安里進（1990）『考古学からみた琉球史 上・下』ひるぎ社
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典第6巻 述語編』三省堂
- かりまたしげひさ（2009）「琉球方言・言語地理学研究小史－「国頭方言の音韻」から『名護市史本編言語』まで」『琉球アジア社会文化研究』12号
- ジョン・C・エイビス著、西田陸・武藤文人訳（2008）『生物系統地理学－種の進化を探る－』年12月、東大出版会。
- 仲宗根政善（1934）「国頭方言の音韻」『方言』第4巻第10号
- 仲宗根政善（1937）「加行変格「来る」の国頭方言の活用について」『南島論叢－伊波普猷還暦記念論文集』
- 中本正智（1981）『図説琉球語辞典』力富書房金鶏舎
- 名護市史「言語」専門部会編（2006）『名護市史本編・10 言語－やんばるの方言』名護市役所
- 琉球方言研究クラブ（1969）「東京方言の一音節名詞に対応する沖縄北部諸方言のアクセント」『琉球方言』第9・10号
- 琉球方言研究クラブ（1967）「東京方言の一音節名詞に対応する沖縄中部諸方言のアクセント」『琉球方言』第8号
- 琉球方言研究クラブ（1964）「続・琉球方言形容詞言い切りの形について」『琉球方言』第6号
- 琉球方言研究クラブ（1963）「琉球方言形容詞言い切りの形について」『琉球方言』第5号
- 琉球方言研究クラブ（1960）「沖縄南部における準一音節名詞のアクセント調査結果」『琉球方言』第2号